東京未来大学

研究推進ニュースレター

Vol. 15

東京未来大学
研究推進委員会
2022 年 3 月 31 日発行

科研費ニュース

令和 4（2022）年度東京未来大学の科研費申請状況は以下の通りです。

		令和4年度						令和3年度					
		こども（保育・教育）		こども（心理）		モチベーション行動科学部		こども（保育・教育）		こども（心理）		モチベーション行動科学部	
基盤研究（A）	一般	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	海外学術調査	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
基盤研究（B）	一般	0	0	1	18,033	0	0	1	7,520	0	0	1	9,735
	海外学術調査	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
基盤研究（C）	一般	3	11,300	2	9,003	4	14,620	6	22,467	2	8,580	3	11,056
	特設分野研究	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
挑戦的研究	開拓	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	萌芽	0	0	1	4,997	0	0	1	3,040	0	0	0	0
若手研究		1	5,000	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ひらめき☆ときめきサイエンス		0	0	0	0	0	0	1	500	0	0	0	0
件数 ／ 金額		4	16,300	4	32,033	4	14,620	9	33,527	2	8,580	4	20,791
合計件数		12 件						15 件					
合計金額		62,953 （千円）						62,898 （千円）					

令和 4（2022）年度，研究種目別の申請件数を見ると，総じて基礎研究（C）が多くなっています。令和 3（2021）年度と比較すると，申請の合計件数はやや減少傾向にあり，合計金額は横ばいの状況になっています。ただし，近年は本学からの申請の採択率が高まり，平成 30（2018）年度から令和 3 年(2021)年度にかけては多くの採択があった実績を踏まえれば（詳細は「研究推進ニュースレターVol.14」をご参照ください），上記は必ずしも悲観的な見方をすべきことではないでしょう。申請あっての採択数の増加ですので，次年度は申請件数が増えることを期待したいところです。

ご自身の研究に合った種目を検討し，申請してください。詳しくは，日本学術振興会ウェブサイト内の科学研究費助成事業（科研費）の制度概要，「研究種目・概要」ページをご覧ください。

https://www.jsps.go.jp/j-grantsinaid/01_seido/01_shumoku/index.html

次年度科研費スケジュールと要領の詳細はまだ発表されていませんが，令和 4 年度公募より，例年 9 月に公募が行われていた研究種目等の公募開始時期・公募締切時期・内定時期が早期化しています。研究種目により公募開始日・提出期限が異なりますので，ご注意ください。

参考として，令和 3(2021)年度のスケジュールを以下に示します。

●ご参考：公募から内定までのスケジュール（令和３(2021)年度）

研究種目名	公募開始時期	公募締切時期	内定時期(予定)
特別推進研究	令和3年7月1日	令和3年9月6日	令和4年3月下旬
基盤研究(S)	令和3年7月1日	令和3年9月6日	令和4年5月上旬
基盤研究(A)	令和3年7月1日	令和3年9月6日	令和4年2月末
基盤研究(B、C)、若手研究、奨励研究	令和3年8月2日	令和3年10月6日	令和4年2月末
挑戦的研究	令和3年8月2日	令和3年10月6日	令和3年度内定時期(7月上旬)よりも早期
研究成果公開促進費	令和3年8月2日	令和3年10月6日	令和3年度内定時期(4月1日)よりも早期
帰国発展研究	令和3年7月1日	令和3年9月6日	令和4年2月中旬
学術変革領域研究（A）	令和3年8月下旬	令和3年10月中旬	令和4年6月下旬
学術変革領域研究（B）	令和3年8月下旬	令和3年10月中旬	令和4年5月下旬
新学術領域研究（研究領域提案型）（公募研究）	令和3年8月下旬	令和3年10月中旬	令和3年度内定時期(4月1日)よりも早期

※特別推進研究及び基盤研究(S)については令和6年度公募から，学術変革領域研究(A･B)については令和5年度公募から，2月の内定通知を目指している。

出典：日本学術振興会ウェブサイト内 ＞ 資料：科研費の最近の動向及び令和４(2022)年度公募について
https://www.jsps.go.jp/j-grantsinaid/06_jsps_info/g_210709_2/data/siryou2.pdf

特別企画

特別企画として，メンタルヘルス岡本記念財団令和 3 年度研究活動助成金に採択された藤後悦子先生に，研究内容についてお話を伺いました。

受賞された研究テーマ
「多汗症を背景とした不適応行動に関する調査―森田療法的視座を取り入れた心理教育プログラムの開発に向けての予備調査―」

Ｑ１：採択された研究テーマと概要，具体的研究方法や研究計画について教えてください。

私事で恐縮なのですが，実は子どもが「汗」のことですごく悩んでいたのです。当初は「汗ぐらい」と私があまり気に留めていなかったのですが，状況が悪化。汗を止めるための手術を決断することになりました。しかし，必ずといってよいほど，手術後は代償性発汗が生じてしまうのです。現在もいろいろと試行錯誤中ですが，子どもの症状に付き合う中で，私自身も勉強になることが多かったのです。特に障害者総合支援法で，多汗症は難病と位置付けられていることには，大変驚きました。

私もきちんと勉強してみなければと，「多汗症」についての研究を探してみたのですが，手術の効果に関する研究はあるものの，多汗症に関する心理学的な研究はあまり存在しておらず，この分野の遅れを痛感しました。また「多汗症」に関するブログなどを調べていく中で，実は，潜在的な悩みを抱えている人は多いのではないかと思うようになってきたのです。

研究方法はインタビュー調査と質問紙調査から構成されています。初めに多汗症の方にインタビューを実施して，多汗症患者を取り巻く状況や困り感，将来への不安などを確認していきました。インタビューに基づいていくつかの仮説を立て，学生への調査と社会人を含めた多世代へのオンラインを実施しました。

Ｑ２：研究計画調書作成にあたって，工夫された点などアドバイスをお願いします。

「メンタルヘルス岡本記念財団令和 3 年度研究活動助成金」をいただくのは 4 回目となります。この財団は森田療法をバックアップしてくださっている財団法人ですので，森田療法の発展に寄与する本研究の意義を全面に出しています。つまりアドバイスとしては，助成金を出してくれている団体の理念や目的なども考えながら文章を作成すると効果的だと思います。民間の助成金では，出張費や物品購入は控えるようにと書いている場合もあるので，その点も留意するとよいと思います。

Ｑ３：研究の進捗はいかがですか？今後の展望についてお聞かせください。

私自身の学内や学外の業務量，そして現在すでに関わっている研究の状況から，新しい研究を一人で行うことは現実的ではないと思いました。そこで，森田療法のセミナーや研究会で長年ご一緒させていただいています他大学の精神科医の先生を誘って助成金を申請しました。実はこの助成金には年齢制限があり，50 歳未満しか応募できないのです。残された機会を活用するために，トライしてみました。結果的に運よく採択となったのですが，実働部隊が一人だと心細く，かつ何か楽しみがないとモチベーションの維持が難しいので，「散歩（ウォーキング）」仲間で，臨床心理学をご専門とする（かつ開学時からの同期で同学年！）の山極先生をお誘いしました。山極先生がプロジェクトに加入してくださったことで，研究しながらのおしゃべりと，打ち合わせ後のお散歩が楽しみで，急に研究がはかどり始めました。頼りがいのある山極先生から多くのことを学ばせてもらっています！

今後の展望ですが，「汗」のテーマは実に奥深いと感じています。今まで行ってきたスポーツの研究とも結びつけたいとも思っていますし，また臨床心理学的な症状と「汗」との関連の検討，そして予防としての心理教育プログラムの作成や企業連携としての商品開発なども行えると面白いかもしれません。

令和３年度 東京未来大学特別研究助成研究発表会（成果報告会）

開催日：令和 4（2022）年 2 月 24 日（木）
時　間：10 時 30 分　角山剛学長挨拶，総合司会：小林久美
　　10 時 35 分　心理系発表，司会：川原正人
　　10 時 35 分　非心理系発表，司会：田澤佳昭

令和 4（2022）年 2 月 24 日（木）に，令和 3（2021）年度東京未来大学特別研究助成研究発表会（成果報告会）が開催されました（本年度の発表会は，Meet によるオンラインのライブ報告となりました）。午前 10 時 30 分，角山剛学長による挨拶に続いて，心理系，非心理系の発表が行われました。発表件数は，全 10 件でした。

以下に，今回ご発表いただいた先生方のお名前と申請課題（発表タイトル）を紹介いたします。また，この発表会における口頭発表以外の特別助成研究テーマや概要の一部を紹介いたします。

東京未来大学特別研究助成研究発表会　プログラム

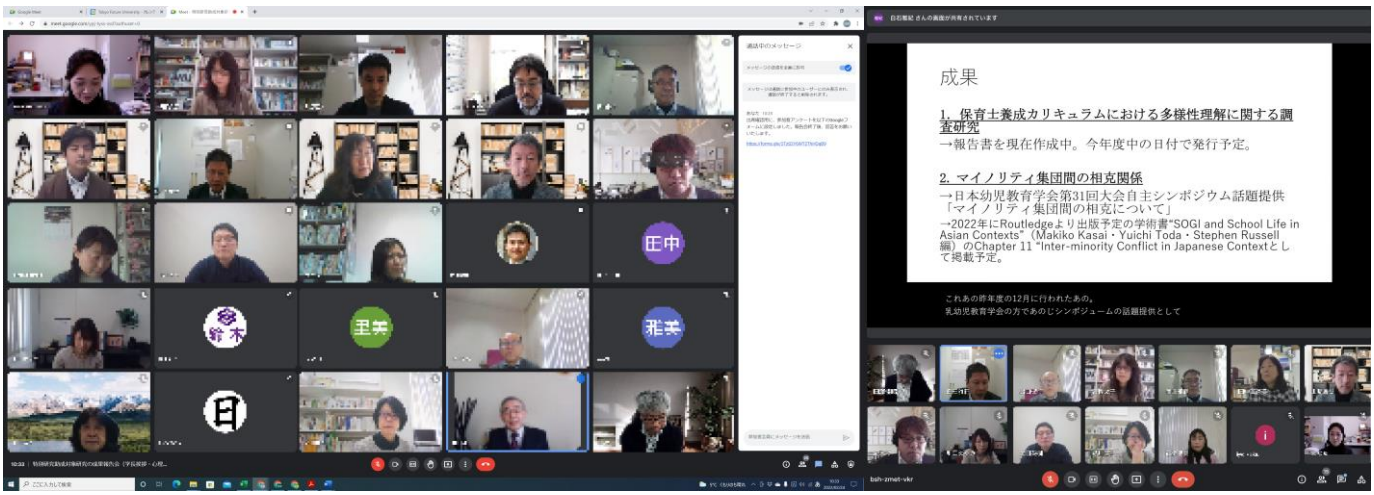
心理系　　（司会：川原正人）

氏名	研究テーマと概要
大橋恵	顕在的態度と潜在的態度との関係，およびその影響に関する研究
	顕在的（意識的な）態度と潜在的（無意識的な）態度の差異や行動などへの影響に関しては，ここ 20 年ほど様々なテーマで検討されている。今年度は，自己評価に関する実験を英語論文にまとめ，新たに「ふつう」をテーマとして実験を行った。
鈴木公啓	心身に関する諸問題に対する心理・教育的介入方法の検討
	おこなった研究の一つに，鏡を見ることによる自己受容の向上に関する介入実験があります。単に見るだけで無く良いところを褒めるということを加えた方が効果があることが確認されました。応用が期待されます。
藤後悦子・大橋恵・井梅由美子 （他・学外 5 名）	勉強を通したよりよい親子関係構築に向けて ―小学校受験・中学校受験における親子関係の課題と解決―
	研究 1 では，中学受験における親子関係の問題に関する実態調査を行った。研究 2 では，よりよい親子関係構築に向けて新宿区の家庭教育ワークシートを活用した実践研究を行った。併せて，家庭教育ワークシートの説明動画を作成した。
野中俊介	新型コロナウイルスによる社会生活の変化がひきこもり者およびその家族の心理社会的要因に及ぼす影響
	まず，システマティックレビューによって，ひきこもり定義の共通要素を検討し，高年齢化の傾向を明らかにした。次に，コロナ禍前後の追跡調査によって，経済状況や余暇活動に関する生活状況の悪化が示された。
小谷博子	コロナ禍における親の育児ストレスとその支援策
	新型コロナウイルスの感染拡大防止のため対面交流に制限が加わり，子育て家庭は子どもと共に家庭内にこもる生活を余儀なくされた。本研究では，コロナ禍における親の育児ストレスとその支援について検討を行った。

非心理系　　（司会：田澤佳昭）

氏名	研究テーマと概要
白石雅紀 （他・学外 3 名）	多文化共生保育に対応する保育者の養成と研修 ―カリキュラム改善の提言に向けて
	福山市立大学の大庭三枝准教授を代表とする研究グループにおいて保育士養成カリキュラムにおける多様性理解に関する調査研究，大阪教育大学の戸田有一教授と共同でマイノリティ集団間の相克関係の 2 点を行った。

田中真奈美 （他・学外 2 名）	外国人児童生徒のノンフォーマル教育選択と進学 ―多民族社会米国・タイからの示唆
	民族的・言語的マイノリティ児童生徒の教育選択への対応，子どもの学習権を保障する方法について，米国とタイの比較から，ノンフォーマル教育選択の可能性と学校教育への接続のモデルを抽出するための研究を行った。
紙本裕一 （他・学外 1 名）	算数・数学授業で終始沈黙する児童・生徒の思考の可能性と限界性についての検討
	算数・数学授業で児童・生徒が黙って授業を受けることに教育的な意義を持たせるため，沈黙をせざるを得ない数学的要因が存在することを教科書分析を題材としたテキストマイニングを通じて明らかにした。
髙橋文子	感性と形象の統合としての「芸術知」の方法論的解明 ～木を描こう/ヒーロー孔雀明王/リベット工作の教材例から～
	「芸術知」概念は，芸術がもっている知的にある程度客観的に示せる美的方法論である。それらの方法論的認識は，後から抽出され，主題/イメージの生成・造形要素/素材・技法の 3 側面に支えられることを確認した。
山﨑善弘	江戸時代の疫病対策
	コロナ禍中の現代人が，江戸時代の疫病対策から学べる点は少なくない。本研究では，当時の医療政策や給付金支給が，時の政治家・政権の強力なリーダーシップの下に大々的かつ迅速に実施されたことに，特に注目した。



発表風景

その他の特別研究助成　テーマおよび概要（一部紹介）

氏名	研究テーマと概要
埴田健司	オリンピック・パラリンピック大会前後における外国人および障害者に対する態度の変化に関する検討
	オリンピック後に外国人，特に中国人に対する身体能力に関するイメージが高くなっていたが，好ましさは変化していなかった。障害者に対するイメージは，パラリンピック後に肯定的な方向へ変化していた。
今井康晴	子ども雑誌におけるペスタロッチの受容
	わが国におけるペスタロッチの受容について考察した。特に明治，大正期に発刊された子ども雑誌を中心に検討した。

井梅由美子・藤後悦子・大橋恵	部活動指導員の活用に関する意義と課題
	本研究では，2017 年度より施行された部活動指導員制度について，部活動指導員や自治体職員，中学校の教員等を対象としたインタビュー調査を行い，その意義と課題について検討した。
金塚基・杉本雅彦・岩﨑智史	高等学校応援団の教育的役割・意味に関する研究
	高等学校応援部の演舞において最も重要な構成要素と考えられる発声技法のあり方を分析することによって，集団的な応援活動の意味の一端を明らかにすることを意図する。
川原正人	コロナ禍での新しい生活様式におけるポジティブな変化
	大学生を対象にコロナ禍におけるポジティブな気づきや変化について検討した。人間関係や生活習慣が存在のありがたみや自己理解に影響し，自己理解が新たな変化・挑戦を引き出すということが見出された。
金瑛珠	保育者が自ら思い描くキャリアプランと保育者の専門性に関する研究（2） ～子どもの主体的な活動を支えるための大人側の要因と専門性との関連について～
	「保育者が保育者であり続ける理由、その面白さ・やりがいは、保育職としての専門性の中にある」という視点から、保育者が面白いと語る実践（子どもの主体的な姿が語られる実践）を分析し、その実践を支える要因や専門性を明らかにする。
小林久美	小学校教科書コーパスの分析による環境教育マトリックスの作成
	研究の一環として 2021 年日本科学教育学会において，「小学校理科および家庭科の環境の捉え方 - 教科書分析を通して - 」という題目で発表した（秀明大学田中元教授，東京未来大学鈴木哲也教授との共同）。
小林祐一	持続可能な総合型地域スポーツクラブの在り方に関するアクションリサーチ
	町のサッカー少年団が NPO となるプロセスを参与観察の手法を用いて考察した。関係者が相互に子ども観，スポーツ観，地域観を共有する過程が組織を維持・発展する要因になり得ることが明らかになった。
三浦卓己	知名度が低い地域でもブランド構築は可能か ～購入意向を中心に～
	本研究は，ブランド拡張の枠組みを用いて，製品に地名を付与した場合の消費者の購入意向の変化を検証します。地名＋製品を地域産品ブランドと仮定し，知名度の低い地域が地域産品ブランドによって購入意向を変化することができ，ひいては地域ブランドの構築が可能かどうかについて実証研究で明らかにすることを目的とします。
森下一成	公共空間における梵字碑の研究 ～真言宗の教義と民衆の受容について
	沖縄本島内における集落の公共空間に存する梵字碑について琉球固有信仰と真言宗との関わりを明らかにした。
西村実穂	災害発生後の保育継続に関する研究 ―浸水被害にあった保育施設を対象として―
	水害により被災した保育施設の復旧過程を明らかにすることを目的として，実地調査とヒアリング調査を実施した。長期間，非常体制で保育を行っている事例や移転をせざるをえない事例が複数あることが確かめられた。
大橋智	遠隔心理支援を用いた教職員を対象とした特別支援教育スーパーヴィジョンの検討
	特別支援学級の担任への教職員支援の一環として，県立総合教育センターを通して，遠隔技術によるコンサルテーションを実施する。ICT/遠隔技術を用いた巡回相談モデルを作成し，実用的なガイドラインの作成を目指す。

太田英樹	特別支援教育におけるスクールソーシャルワークの実践動向
	近年，スクールソーシャルワークの重要性が強調されています。すでに特別支援教育の分野では，各校の特別支援教育コーディネーターの機能を強化されているところです。この 2 つの分野における連携がどうあるべきかの検討が重要と考えられます。
島内晶	記憶の失敗経験の認識が高齢者のメタ記憶に及ぼす影響
	高齢期には，「記憶の失敗経験」が増加するが，その失敗には「自覚がない」ものも含まれる。本研究では，その失敗経験への指摘が，高齢者の「メタ記憶（記憶の自己認識）」にどのように影響を及ぼすのか検討する。
杉本雅彦	高等学校における応援部の応援技法に関する考察 ―発声技法の習熟に焦点をあてて―
	本研究は応援団の発声について，ケプストラム分析により基本周波数 f0 を指標として分析を行った。その結果，応援部員は未経験者と比べ，基本周波数 f0 の平均値が高く，値が異なることが明らかになった。
鈴木哲也 （他・学外 1 名）	理科コーパスにみられる動物と他の用語のつながり
	小学校理科の教科書内における動物と関連する用語のつながりに本研究では注目し，理科コーパスにみられる動物と他の用語のつながりを，小学校の教科書をもとにマップをつくり，明らかにした。
柳生崇志	幼児の Flow を引き出す園環境
	主体的に環境と関わりながら遊びに没頭する状態，すなわち Flow の体験が，どのような園環境（園庭・園舎・活動・保育者）によって子どもにもたらされるのかを考察する。

編集後記

科研費の採択についてはこれまでも研究推進ニュースレターでご紹介してきましたが，本号では特別企画として，科研費以外に助成金の採択された先生のお話を伺いました。ご協力いただきありがとうございました。

今年度の成果報告会は昨年度に引き続きオンラインでの開催となりました。コロナ禍による難しい状況が続く中でも先生方が弛まず研究を進められており，本学が持つ研究力のポテンシャルの高さが示されたように思います。最新号，どうぞご味読のほど，よろしくお願いいたします。

研究推進委員　川原正人